【資料紹介】

池田英雄著『修学の道場回想録 －七十年前の想い出の糸をたぐりて－』（承前） ～「大東文化学院」と「財団法人無窮会」との「分身同心」について～

浅沼薫奈

【解題】

はじめに

本稿は、大東文化学院本科３期生、高等科６期生である池田英雄による『修学の道場回想録　－七十年前の想い出の糸をたぐりて－』（以下、『回想録』）について、前号（第三号）に引き続き紹介するものである。紙幅の都合上、本稿では「第二部　財団法人無窮会東洋文化研究所当時の想い出　＜六十余年前の回想録＞」のみを紹介するものとし、以降については別途改めて紹介する。なお、池田氏経歴及び『回想録』目次（構成）全容については、前号を参照されたい。

池田英雄は、大東文化学院本科及び高等科において計六年間を学んだ後、1933（昭和８）年より自身の母校でもある、財団法人日本中学校の漢文科教員となった。敗戦後も幾つかの新制都立高等学校を中心に、漢文科教員を勤めた。財団法人無窮会東洋文化研究所研究科一期生として入学したのは1940（昭和15）年のことで、日本中学校に在職中の32歳の頃であった。2年半ほどを研究科生として過ごした後、病気療養を理由に退学した。なお、だいぶ後年のことになるが、1971（昭和46）年３月の63歳となる年に当時在職していた都立豊多摩高校教諭を辞し、亡き父の遺稿であった『史記補注』百三十巻の校訂に専念することを決意した。同年に無窮会より研究費及び刊行助成費支給が決定され、「池田四郎次郎先生遺稿の史記補注研究」が３年

計画で本格的に進められることとなったのである。同研究成果は、明徳出版社から『史記補注』上下巻として1972（昭和47）年及び1975（昭和50）年に刊行された。

本稿で紹介する『回想録』第二部は、財団法人無窮会東洋文化研究所における研究科一期生として過ごした日々の想い出が中心である。無窮会と大東文化学院との関係については前号掲載の「解題」中でも少し述べた。また、本文中においても、平沼騏一郎の立ち上げた機関であるとして平沼の経歴とともに無窮会創設の経緯に触れられているが、その沿革と本学との関係性について、最初に改めて簡単に確認しておこう。また、研究所の内容や関係者等について本文中で触れられていない箇所などに関し、補足しておくこととする。

1．無窮会東洋文化研究所の発足

無窮会は、もともと国学者井上頼圀が1914（大正3）年に死去した際に、その膨大な蔵書３万５千冊余が散逸することを関係者が危惧し、図書散失を防ぐことを目的として平沼騏一郎が自宅敷地内に書庫を設置したのが始まりとされる。1915（大正4）年4月に「無窮会」と名づけて、蔵書を使用した輪読や研究などの活動が開始され、翌年7月には平沼邸内設置の書庫が完成した。その後、同会は財団法人として認可され、理事会長には平沼騏一郎が就任した。ただし、この間の活動には目立ったものはなく、輪講輪読などを目的に、断続的に研究者たちが集い議論しあうことが主となっていたようである。

一方、大正末から昭和初年にかけての大東文化学院は、紛擾事件で大いに揺れていた時期であった。大東文化学院第二代総長となった井上哲次郎の改革方針への反発から、「私学派」教員の一斉辞職といった事態に発展した学院紛擾事件であるが、無窮会において「私学派」教員は再び集結したという。実際、無窮会と深い関係のあった東洋文化協会の機関雑誌『東洋文化』への「私学派」教員による投稿が、1926（大正15）年末から昭和初期にかけて盛

んになされていたことが確認でき、無窮会及び東洋文化協会が彼らの研究発信上の重要な拠点となっていたことがわかる。なお、「東洋文化協会」とは、大隈重信を初代会長として1921（大正10）年に開設された東洋研究や漢学研究を目的とした学術団体である。大正期には漢学振興運動に関与して大東文化協会設立に助力し、1943（昭和18）年に財団法人無窮会へと吸収合併された。

「無窮会」「東洋文化協会」「大東文化協会」という３つの団体は、以上のような経緯を辿りつつ密接な関係を持っていたことから、称して「分身同心」といった表現を用いるようになった所以である。相互に強い結びつきがあり、当時の「漢学者」たちにとって重要かつ最も高尚な学問の場の一つとなっていったのであった。

その後、財団法人無窮会は1940（昭和15）年4月に「東洋文化研究所」及び「書庫」を新たに設け、第一回研究所研究生を募ることとなった。場所は、新宿区西大久保の無窮会内の一角に設置された。池田英雄は、この研究所研究科第一期生となったわけである。因みに、初代所長にも平沼騏一郎が自ら就任した。そのことからも、同研究所へかけた期待の大きさが伝わってくる。当時の平沼は、前年の1939（昭和14）年1月に内閣総理大臣となっていたが、同年8月にはノモンハン事件を受けて総辞職するという、政治家として重要な局面を迎えていた。1940（昭和15）年11月には近衛文麿内閣の内相に就任しており、多忙を極めていたさなかであったと同時に、皇道派としての活発な動きを見せていた時期でもあった。

英雄は本文中で、研究所の設置は「大東文化学院で果たし得なかった建学精神の再興を期された」ものであったと述べているが、設置経緯に大東文化学院の建学理念が果たしてどのように関与したかは不詳である。ただし、研究科生として同期であった原田種成も自著『漢文のすゝめ』（新潮選書、1992年）において、「東洋文化研究所を創設し、次代を担うべき学究的人材の育成を目ざす教育機関としてスタートしたのも、大東文化学院で果たせなかった志を実現しようとした証であった」（同書129頁）と述べている。また、

大東文化学院紛擾を期に学院を去り、他校へと移籍していった私学派教員が複数人いるが、東洋文化研究所開設時の講義担当者一覧の中に再び彼らの名前が見られることは注目される。例えば、川田瑞穂（雪山）は大東文化学院草創期に助教授として就任していたが、紛擾時はすぐさま学院を去った筆頭であった。東洋文化研究所発足当時は早稲田大学教授であり、研究科生に対しては詩作等を指導している。また、同時に学院を去り同様に早稲田大学へと移籍していた松平康国、松本洪の名前も講師陣のなかに見られる。他方、当時現役の大東文化学院教授陣も同様に名前を連ねており、国分青崖や内田周平、上野賢知のほか、加藤虎之亮、今泉定助、佐伯有義、吉田増藏を含め、東洋文化研究所講師陣として全10名の名前が本文中に記されている。英雄によれば、ここに挙げた教員10名総て大東文化学院時代に直接に指導を受けた恩師であったという。つまり、東洋文化研究所開設にあたり、大東文化学院草創期の教授陣が再び一堂に会することとなったのである。いずれにしても、東洋文化研究所の目的が、次代を担う漢学者養成を改めて目指したものであったことは確かであった。

２．東洋文化研究所研究生の公募

前述したように、第一回研究生募集広告を見た英雄は、すぐさま応募し採用された。当時の「採用要綱」が英雄の手元に残されており、それによれば、本科生と研究科生とが各10名ずつ、計20名の募集であった。東洋文化研究所研究科一期生となったのは、英雄の記録では同期9名であったという。名前の挙げられているうち、原田種成は大東文化学院本科及び高等科の卒業生である。原田種成については、『回想録』第三部において詳述されているので詳細は稿を改めることとするが、大東文化学院高等科在籍中より諸橋轍次にその抜きん出た漢学力を評価され、大修館『大漢和辞典』編纂事業の中心メンバーとして活躍し、後に大東文化大学教授となった。1957（昭和32）年より、請われて無窮会東洋文化研究所の講師も勤めている。大東文化学院生としては、英雄の二期下級生であった。なお、英雄は「私学派」教員であっ

た池田四郎次郎の子であり、一方の原田は諸橋のもとで「官学派」に属していたと見られている。思想の違いがあったであろう講師も受講生も、こうして再び同一の学問に向き合い、机を並べることとなったのである。

さて、新設された東洋文化研究所の修業（学習）年限は、本科生と研究科生ともに３年とされ、通算６年間を学べるように設定されていた。受験資格等から見ると、「本科生」と大東文化学院「高等科生」とが同等の入学者資格及び教育課程として設定されており、「研究科」はそれ以上の学力を有している必要があった。すなわち、研究所本科生には「中等学校国漢文教員有資格者」か同等の学力のある者、研究所研究科生には「高等学校漢文教員有資格者」か同等の学力のある者、としている点である。一方の大東文化学院高等科への入学資格は、「高等師範学校又ハ専門学校ノ本科生トシテ漢文科若ハ国語漢文科ヲ卒業シタル者」「漢文科又ハ国語漢文科ノ中等教員免許状ヲ有スル者」等と定められていた。前述の原田種成と英雄は、ともに大東文化学院高等科まで計６年間を学び修了しており、当時の原田は明治大学附属明治中学校の、英雄は日本中学校の、ともに漢文科教員を勤めていた。在学中から秀才と名高かった彼らが、漢学に関してすでにかなりの実力を持っていたことは経歴から見て明らかであり、さらにこの東洋文化研究所研究科生として研鑽を積むことになったということからも、相当高度な学習が行われたことが推し量られる。なお、英雄は大東文化学院卒業後に中等教育機関の漢文教員となっていたが、東洋文化研究所研究生になるまでの期間も絶え間なく漢学研究を続けていた。仕事からの帰宅後は夕食もそこそこにしてすぐに机に向かい、翌日の授業準備を終えた後は、ずっと亡き父の後を継いで「史記補注」にとりかかっていたという。

また、東洋文化研究所は月謝を不要とし、年額二百円の奨学金が支給された。開講は夜間６～９時とされ、週３日（研究科）あるいは４日（本科）の開校、中学校の教員を続けながら就学することが可能であった。というよりも、おそらく中学校等で教壇にたつ漢学者たちの研鑽を前提としていたものであった。英雄と原田種成については前述したが、そのほかの同級生も後述

のようにすべて陸軍士官学校教官や、開成中学校、師範学校などで漢文科を担当する現役の教員たちであった。そのため、各々が受給される二百円の奨学金は生活費ではなく、ほとんどを書籍購入資金にあてていたという。

３．同期生及び講義内容

英雄は当時の恩師や同期生について、以降に続く『回想録』第三部中において、級友や親交のあった人々の名として 10 名余り挙げて紹介している。さらに『回想録』第四部では恩師５名の名を挙げ、詳細を記している。すなわち、浜隆一郎（青洲）、川合孝太郎（槃山）、川田瑞穂（雪山）、竹下幾太郎（陸軍少尉）、吉田増蔵（学軒）である。後述される彼らについては第三部、第四部を紹介する際に稿を改めて言及することとし、本稿では本文第二部中に登場するそれ以外の関係者について説明を加えておくこととする。

研究科の同期生として、英雄は自身のほか８名の名前を挙げている。そのうち原田種成については前述した。石川梅次郎と小島政雄は、陸軍士官学校の現役教官であった。山崎道夫は当時師範学校教授であり、上田喜太郎と小沢文四郎は本文中には当時の職業が記されていないが、上田喜太郎は小菅香林から漢学を学びその後小学校教諭を勤めながら独学で漢学や国文学を志し大成した人物である。小沢文四郎は東京師範学校卒業後に中国留学を経て帰国した時期に当たり、研究生となった頃は東京師範学校講師に就任が決まっていた。その後は東洋大学教授などを歴任しており、漢学に関する多くの著書を残している。戸村朋敏は当時開成中学校の教諭であり、三浦叶は早稲田大学卒業後に同大学助手となっていた。ともにその後はいくつかの大学で教壇に立つ一方で、無窮会理事等を務めることとなった。原田種成や石川梅次郎も敗戦後は大学教員を務めつつ、研究科生修了後は無窮会の研究運営活動に深く携わるようになった。研究科一期生たちは、後年には東洋文化研究所所長や専門図書館館長を務めるなど、何らかの形でその後の無窮会活動の維持に重要な役割を果たしていくこととなったのである。

さて、研究所の授業については「殆どは輪講式であった」と記されている

が、輪講輪読は大東文化学院においても伝統的な授業形式であった。指名された者が原文を読み、解説をし、級友からの質疑に応えるという方法である。しかも指名される順番が決められておらず、「韻筒」の使用を好む講師たちがいたことが当時の受講生たちを厳しく鍛えることとなったという。竹筒の中に韻字番号が書かれた札が入っており、それを引き当てた順に課題を読み進めるという方法で、全員どこが当たるかわからないので全範囲を予習せざるをえない。この方式は英雄だけでなく、他の受講生にとっても非常な負担であったことが述懐されている。漢学に関する科目に関してこういった輪講輪読が毎週3日行なわれたほか、月はじめに一回の割合で作詩と漢作文とが課題として出されたという。

研究所開所当時に発表された講師には、次の10名の名前が挙げられている。今泉定助、上野賢知、松平康国、松本洪、内田周平、加藤虎之亮、吉田増蔵、佐伯有義、国分高胤（青厓）、川田瑞穂（雪山）である。このうち、内田周平、国分高胤等は当時も大東文化学院教授であったが、前述したように、川田瑞穂、松平康国、松本洪は大東文化学院を辞してから早稲田大学等へ移籍していた。また、当初に発表されていた講義科目と担当講師とは、実際に開講されてみると、やや異るものとなったらしい。例えば、内田周平は「論語」とされているが実際には「宋学」を講じ、「論語」の講義は松平康国が担当し、加藤虎之亮は「書経」ではなく「詩経」を講じるといった具合であった。また、「作詩」は国分高胤が主として評し、川田瑞穂がその傍らで朱筆を持って添削するという体制であったという。なお、大東文化学院でも教壇に立っていた川合孝太郎の名がここには見られないが、川合は「周礼正義」を開所当初に一度講じた直後に死去してしまったという。川合については、英雄は「第四部」冒頭で特に想い出深い恩師の一人として取り上げている。講師陣は高名である一方でかなり高齢であり、吉田増蔵は1942（昭和17）年に死去しており、内田周平も当時すでに80代半ばで1944（昭和19）年12月に90歳で死去した。国分高胤、今泉定助も1944（昭和19）年に、松平康国、佐伯有義は1945（昭和20）年に死去した。また、大東文化学院

高等科の卒業生であった当時40代で新進気鋭の若手研究者の相良政雄が東洋文化研究所の教務主事を勤めたというが、開所翌年に病気が悪化して死去した。旧制期に生きた漢学者たちは自身の命が尽きる直前、3年間にわたり研究科一期生たちに漢学の神髄を伝え、まさに「次代へ」と学知を繋げたのであった。

おわりに

以上のように、「先人の意思を継ぎ、古典籍に基づく学識」を養うことを目的として、無窮会東洋文化研究所は開設され、次代を担う研究者育成が行われることとなった。東洋文化研究所の一期生及び講師たちは、後世へと繋ぐ漢学者育成の重要な素地を培ったのである。漢学を求める後人へ学知を伝え、古典籍の蒐集、収蔵、公開、研究の中心となった。著者である池田英雄は残念ながら病気療養のため、修了まであと半年というところで退学となってしまった。しかし、研究科第一期生たちがいかに高いレベルの学習をこなしていたか、以下に紹介する本文から十分に読み取ることができる。東洋文化研究所における教育内容が、大東文化学院での教育に深く繋がっていることからも、本資料は本学教育史の重要な一端を明らかにするものと言える。

【解題者注】

原稿について、基本的に原文をそのまま掲載しているが、①本文中の明らかな誤字等については適宜修正を加えている。また、ごく一部に旧カナ遣い等が見られたが、現代カナ遣いに整え統一した。一方、敬体と常体との混在使用はそのままとした。②『回想録』第三部以降については本稿では掲載を省略し、引き続き次号以降に掲載を検討するものとした。

【修学の道場回想録　－七十年前の想い出の糸をたぐりて－】

第二部

（一）無窮会の創設と、その活動状況

①会の創立者と、その抱負

無窮会は平沼騏一郎先生の創立になる。先生は大正四年（1915）に、西大久保のご自宅構内に「無窮会」を設立し、ここに図書館を設け、本邦並に中国の古典籍の蒐集につとめ、且つ季刊誌「東洋文化」を発行し、専ら国家警世に努められた。更にその後二十五年にして、昭和十五年（1940）には、宿題久しかった「財団法人無窮会東洋文化研究所」を創設して、ここに嘗て大東文化学院の創設時に抱かれた理想の夢、即ち「碩学鴻儒の後継者たりうる学徒の養成」の実現を期されたのであった。

先生のご事績を述べるに先立って、先ず先生のご履歴を尋ねてみたい。ご履歴については幸いに、「大東文化大学創立80年誌」（原文ママ）に詳述されている。そして、その見出しには、先生の波瀾に富むだ生涯を短いことばで、先のよう六行に要約している。

岡山県の藩の息子として生まれ、
明治・大正・昭和と、
激動の近代日本を駆け抜けた
大東文化大初代総長平沼騏一郎。
その生涯は
波乱に満ちた人生でした。

とあり、これにつづいて、本文はご履歴を詳細に記している。但、やや長文にわたるので、要点を摘記して左に記したい。

大正十二（1923）年九月二五日からおよそ一年半にわたり、大東文化大学の初代総長を務めた平沼騏一郎は、明治維新以降、怒涛のごとく流入してきた欧米文化の波に呑み込まれ、やがて戦争へと突き進んでいく近代日本の中にあって、波乱万丈の生涯を送ります。

慶應三（1867）年、美作（岡山県）津山藩士平沼晋の子として生まれた騏一郎は、明治二十一（1888）年、東京帝国大学法律学科を主席で卒業後、司法省に入り判事となります。＜中略＞大正元（1912）年に検事総長となる。＜中略＞大正十二（1923）年、第二次山本権兵衛内閣の司法大臣として初入閣した。＜中略＞大正十三（1924）年貴族院勅撰議員、枢密顧問官となり、社会運動や西洋物質文明を害毒とし、復古的日本主義による国民教化を目指した「国本社」を創立。そして昭和十一（1936）年には、天皇の最高諮問機関である枢密院の議長に就任しました。

昭和十四（1939）年第一次近衛内閣の総辞職後、平沼は第三十五代総理に就任し、国民精神総動員運動を展開します。しかし、ソ連との関係が悪化する中、日独伊三国同盟を結ぶことを主張していた平沼にとって、独ソ不可侵条約が締結されたことは衝撃的で、平沼内閣は総辞職した。＜中略＞昭和二十三（1948）年、敗戦後の軍事裁判によって、平沼は戦争首謀者として終身禁固刑を言い渡され、昭和二十七（1952）年に病気による仮釈放の直後、その生涯を終えました。

とある。

右記の履歴書によって、先生の公的履歴は明確に知ることが出来るが、先生の生涯に於ける最大の痛恨事は八月十五日のポツダム宣言受諾の詔書の発布された当日のことであったろう。当時枢密院書記官であり、また平沼枢府議長秘書官の両職をつとめておられた高辻正己氏は、五十年前のこの日のことを思い出されて、このことを「東洋文化（無窮会創設八十周年記念特集号、平成七年刊）」に寄稿されている。それは上下二段組みの三頁にわたるやや長文のものであるので、ここには、そのごく一部分を抄録してみたい。それは次のようである。

「ことし平成七年八月十五日には、第五十回目の終戦記念日を迎える。（中略）この日、天日晴れて暑気強し。平沼議長の参内に随行すべく、モーニングコートにゲートルを着装し、小田急線を経て西大久保の議長私邸

に至れば、なんぞ図らん、邸宅ことごとく灰燼に帰しあり。平沼議長の安否がまず案じられ、警備の巡査に身分を明かして尋ねしところ、六時ごろ士官に引率せられたる抗戦派一団の襲撃するところなりしが、議長は危うく難を免れ、警備員の誘導により淀橋掲載所長官舎に非難しありと言う。ひとまず安心して直ちに署長官舎に赴き、二階の一室にて国民服を着用し従容端座したる議長に面接、署の車に擁して参内す。

午前十一時半、皇居吹上御苑の地下構築物の一室に議長のほか十四名の枢密顧問、鈴木（貫太郎）内閣総理大臣、東郷（茂徳）外務大臣、参集。本院書記官長、書記官、村瀬（直養）法制局長官、参列。前髪が額に垂れ給い、憔悴の色濃くおわします陛下の臨御を仰いで会議。平沼議長開会を宣し、特に賜りたる御沙汰書を朗読し、政府当局の説明を求む。鈴木首相まず今回の措置につき一言したる後、東郷外相より戦争終結に関する国際情勢の推移及び、これに伴う措置につき詳細にわたって説明あり。正午から録音による陛下の御放送があるにつき、暫し会議を中断。地下壕の御座所の隣室に控えて玉音を拝聴す。平沼議長始め悌泣（ママ;涕泣）せざる者なし。約二十分を経て会議を続行。主としてポツダム宣言の内閣に関する質疑応答あって後、午後一時半閉会。

さて、その八月十五日は、灰燼に帰した平沼邸を目の前にしながら、平沼先生の職責の遂行に気を奪われ、応召中の夫君の帰還を待ち侘びていられた節子夫人や、その膝下で甘えていた宣子・赳夫の両児達の安否を気遣う余裕が私には更になかった。云々。」とある。

○当時、幼少であった赳夫氏も、今や立派に成長なされ、国民を代表する代議士となられ、先年は経産省大臣ともなり国政に参与されている。また昨年よりは、義兄筧正夫氏のあとを続ぎ、財団法人無窮会理事長に就任され、祖業を開拓されている。

②無窮会を創設した人々と、その信条

大正から昭和の初めにかけての西洋文明・文化に傾倒し、その反面、日本古来の伝統の美を失いつつあった。先生はこの世状を憂えられ、これに対す

る手段として執られたのが、「国家有為なる人材の養成と国民精神の涵養」とであった。そしてこの信条を具現化する方策として執られたのは、第一には「今まさに絶えむとする碩学の後継者を育成し、古来伝統の万全を図ること。」であり、第二には「これら学徒の勉学に資するために和漢の図書の蒐集と、これが整備を整える」ことであった。これらの抱負を如実に物語る第一等の資料として見逃すことの出来ないものに「無窮会沿革誌」がある。これは無窮会発行の「神習文庫図書目録（昭和十年十一月刊、1936)」の末尾に付されている。左に貼付してみたい。

無窮会沿革誌

明治の初、欧米物質文明の移入に急なりしため、智識偏重の弊を生じ、其の末年に及びては軽佻の風、浮花の俗人をして憂慮に堪えざらしむるものあり。是に於て平沼騏一郎・織田小覚・河村善益・秋月左都夫・土岐償（コウ）・早川千吉郎・北條時敬の諸氏、相期して西大久保の平沼邸に会し、之が匡救の策を講じ、各自の所見を披瀝して、往々夜半に及ぶ。尋で井上友一・二木謙三の二氏も亦来り加はる。同人謂へらく、時弊匡救の道は、古典の闡明、皇道の宣揚より善きはなしと。乃ち文学博士林泰輔氏を聘して、毎週一次大学衍義補の議席を開き、有志の士をして参聴せしむ。偶ま故文学博士井上頼圀氏の蔵書三萬五千余冊市に出づるの説を聞く。同人相謀りて曰く、之をして書賈の手に帰せしめんか、碩学多年の蒐集、一朝にして分散の厄に遭はん。如かず同人の力によりて之を完存し、以て皇道闡明の資に供せんにはと。遂に会を組織して無窮と命名し、書を購ひて会の有と為す、実に大正四年四月なり。因り地を平沼邸の傍に相し、会館並に書庫を建造し、五年七月に至りて成る。井上氏の齋号に取り、神習文庫と称し、秋月氏を推して会長とし、役員を定めて各事務を分担し、調査員を委嘱して、調査研究に着手す。当時調査主任の懐抱せる調査事項の要目左の如し。

無窮会調査項目概略」

この末尾に誌されている「無窮会調査概略」は、十二項目に及んでいるが、

ここには省略する。ただこの「無窮会沿革史」によってしられることは、翌年の大正十五年（1916）には早くも、（一）平沼邸の傍に無窮会館と書庫とを建設し、（二）故文学博士井上頼圀氏の蔵書二万五千余冊を購入して、皇道闡明の資に供されたことである。これは大東文化学院の開校の年、即ち大正十三年（1924）を遡ること実に八年以前のことであった。

当時、平沼先生と、その志を同じうした方々のご芳名を記しておく（敬称略）。

織田小覚（漢学者、前田公爵家の学事顧問）

河村善益（東京控訴院検事長）

秋月郁夫（外交界の長老・駐オーストリア大使）

土岐僙　（帝国製麻株式会社常務取締役）

早川千吉郎（三井銀行頭取）

北条時敬（のちに東北帝国大学総長・学習院長）

平沼先生は、これらの方々と相図り世人の欧米一辺倒、知識偏重に陥るの弊を救済するの手段として、資材を投じて「無窮会」を創立されている。

③無窮会と大東文化学院とは分身同心であること

大正十二年（1923）に新設の大東文化学院設立の精神は、平沼先生の無窮会設立の精神と完璧なまでに一致するものであった。ここに於て先生は教授陣の編成は、京大系・東大系・私学系三派の嘗ての合議の結果を受けて、主として私学派の碩学鴻儒を以て編成された。それは自ずから無窮会傘下の人々を中心に編成されたのであった。ここに於て先生が長年にわたって懐かれた理想の夢は、更に一段と大きくふくらむことと成った。この夢は無窮会発行の「東洋文化第一巻、第一号」大正十三年一月十日発行の巻頭を占める「発刊の辞」の中にみることができる。その中では次のように述べている。

「･･･（前略）本会と分身同志なる大東文化協会の興るありて、胥倶に力を協せ、漢学教育を主とする東洋文化大学の建設準備として、大東文化学院新たに講を開かんとす。則ち本会が多年力説したる漢学振興の事業は必ず年を逐うて相当の功果を収めることあるを信ずるものなり

云々」とある。

④私学派の人々の退陣後の動静について

昭和元年（大正十五年（1926））には平沼先生と志を同じくした教職員一同は、こぞって総辞職された。この折り先考蘆洲もまたその行動を共にした。かくして平沼先生の大東文化学院創設に托した理想の夢は空しく挫折をみることと成った。これら教授を中心とする方々は一致団結し、当時西大久保に在った無窮会に據って将来への展望をえがき、初志の貫徹を期したのであった。

当時、その行動を共にした方々は、凡そ次のようである。――漢学の面では、平沼会長の顧問格であった早大教授牧野謙次郎（藻洲）64才、同じく早大教授で後に東洋文化研究所の教頭を勤められた松平康国（天行）の両先生があった。この松平先生は先考蘆洲63才よりも二―三才のお年上であった。会の運営にたずさわり、事業の推進役となったのは後に当研究所の学監・所長代理をつとめられた川田瑞穂（雪山）47才先生と、同じく後に所長となった松本洪（如石）50才先生のご両人で、常によくコンビを組まれていた。また、後に理事長、並びに東洋文化研究所の所長の大任に当られた文博加藤虎之亮（天渕）47才先生との三人は蘆洲よりも十余年お若かった。また早稲田大学の教授（ママ）で、後に当研究所の講師を勤められた川合孝太郎（槃山）先生は奇しくも先考蘆洲と同年であった。この他には、崎門学者として有名な内田周平（遠湖）先生や、世に詩聖とうたわれた漢詩界の大御所、国分高胤（青崖、太白山人）先生、並に佐伯有義先生がおられた。加藤虎之亮先生と共に武蔵高等学校（旧制）に勤務されていた上野賢知42才先生は蘆洲よりも二十才ほど若かったし、相良政雄先生は更にお若く少壮の学徒と云うよりも私等の兄貴分と云った恰好であった。

この他には大東文化学院時代に事務書記を勤めた斉藤徳明氏や、事務補助役の中島英樹氏等がおられた。これらの方々はひとしく大東文化学院奉職当時に紛争の苦しみを味あわれている。

また、ここにお一人、林正章氏の名を記しておきたい。この方は大東文化

学院とは直接のかかわりはないが、無窮会図書館の実務を一手にひき受けられ、この図書館の生き字引と称せられ、私等一同はたいそうお世話に成ったものであった。先考蘆洲はこれら志を同じうする方々の変らぬご親交をえて、事後多年に渡って同会の評議員をつとめ、その季刊誌「東洋文化」誌上へ寄稿の筆をすすめることが出来たのであった。

⑤待望久しかった「無窮会東洋文化研究所」の創立（昭和十五年（1940））

この創立の期は、平沼先生の大東文化学院総長ご引退後、満十五年目に当る。先生は多年の宿願いよいよここに成り、自ら所長となって嘗て大東文化学院で果し得なかった建学精神の再興を期された。

私は昭和十五年四月（1940）に募集の第一回研究生十名中の一人として幸いにも採用の光栄を荷った。当年発表の「学生採用趣意書」には「皇道儒学の本質を闡明にし斯道の大家を造成するを目的とす」と記されている。即ち研究所創設の目的は“先人の意思を継ぎ、古典籍に基づく学識を養って、次代を背負って立つ有為なる人材の育成を期されたものであった。

⑥開所当時の教授陣の陣容

この度の教授陣の編成は専ら私学派の耆宿を以てこれに宛てられた。これらの方々は、嘗て大東文化学院の創立時に所長と共に苦楽を共にした方々であった。

当年発表された講義課目とご担当の講師名とを次に紹介してみよう。

科　目	講　師
古事記	今泉定助　先生
祝　詞	上野賢知　先生
論　語	内田周平　先生
書　経	加藤虎之亮先生
詩　経	川田瑞穂　先生
左　伝	国分高胤　先生
東莱博議	佐伯有義　先生
御批通鑑輯覧	松平康国　先生

近思録　　　　松本　洪　先生

世説新語補　　吉田増蔵　先生

唐詩選

作　文

作　詩

右に記した十名の方々のご芳名を拝誦していると、なつかしさ一入であった。それと云うのも、いずれの方々も十余年前、私の大東文化学院入学当初にご指導いただいた恩師であり、そしてはからずも今回再び私はこれらの先生方にご指導いただくこととなったからである。私は昼間は母校の日本中学校（旧制）に勤務しながら、夜はこれらの先生方にお教えいただける幸を味わうこととなった。この開講の当時には牧野謙次郎先生は已に他界されておられ、先考蘆洲もまた道山へ帰していた。説文学に詳しかった川合孝太郎先生は、この度の開講の後、間もなくご逝去されてしまわれた。これらの方々に開校のよろこびをお見せすることの叶わなかったことは、何とも残念の極みであった。

⑦研究生採用要項

今回の「東洋文化研究所研究生採用要項」

(1) 受験生採用員数

（一）本科生（十名）

（二）研究科生（十名）　の二種に別れ、両者併せて二十名の採用となる。

(2) 学習年限

（一）本科生（三年）

（二）研究科生（三年）　と定められ、両科を通算すると、六ヶ年となる。

(3) 応募者、受験の資格

（一）本科生は　中等学校国漢文教員有資格者及びこれと同等の学力のあるものとする。

（二）研究科生は　本科の卒業生、又は高等学校漢文教員有資格者及びこれと同等の学力のあるもの。

(4) 課程日程

○本科の授業は毎週四夜

○研究科の授業は毎週三夜　共に午後六時半から九時まで

修業規則は凡そ右記のように定められていた。

⑧研究科生当時の想い出

○研究生に採用されて、――私は幸いにも第一期研究生の一人として採用された。これより向う三ヶ年間に渡って、級友とともに再び一学生気分に立ち返り、この上ない学習の喜びを味あうこととなった。級友はいずれも俊秀であり、昼間は夫々に育英の業に従って健闘していた。そして午後六時の開所の刻限に遅れてはならじと、あわてて食事をとり。或時は食事もとらずに、あたふたと馳せ参ずると云った有様であった。当時の級友は昼間はそれぞれに職場を異にし、且つは年令も異なる同志であったが、一様に向学の志は強く、互に切磋琢磨し、教室は常に研学の熱気につつまれていた。

当時の級友の姓名と、昼間の執務先とを想い出すままに記してみると(ママ)、(五十音順)

(第一期生)	(当時の職種)
1. 池田英雄	(日本中学校教諭)
2. 石川梅次郎	(陸軍士官学校教官)
3. 上田喜太郎	
4. 小沢文四郎	
5. 小島政雄	(陸軍士官学校教官)
6. 戸村朋敏	(開成中学校教諭)
7. 原田種成	(明治大学附属明治中学校教諭)
8. 三浦　叶	
9. 山崎道夫	(師範学校教授)

⑨当時の授業の形態と、想い出の恩師

授業の殆んどは輪講形式であった。指名された者は、原文をまず読み、且つ解説するのが立前であったし、その解説を終えれば、学友からの質疑にも

応えなくてはならないのであったから、前以て予習を十分にしておかなくてはならなかった。先生の中には韻筒を用いて読者を指名する方もあったから、前回に当ったから、今回はもう大丈夫と安心する訳にはいかず、従って予習も毎回十分にしておかなくては叶わぬことであった。これらの授業の他に、尚お宿題として、月々漢作文一篇と、漢詩作製の課題もあったから、その学習は中々気を抜くことの出来ない、そして高度で厳しいものでした。

素読の輪講の中でも、とりわけ難しかったのは、加藤虎之亮先生ご指導の詩経十三経注疏であった。席上指名された者は、先ず一くだりの本文をよみ、次に注文をよみ、更に疏へとよみ進むのであった。注までは兎も角としても、疏までも正確によみこなすことは中々容易なことではなかった。先人の訓点にたよろうとしても、「疏」まで句点を施した書物はこの世に皆無なのであるから、自力でよみすすみ、いわば前人未踏の世界を切り開いて行かねばならなかった。但、この訓読修業のおかげで、白文素読の実力はぐんと養われた。

ご担当の加藤先生は指名者の素読し終る毎に、その誤りを訂し、訂し終ると、先生は一語一句をゆるりと、そして明確に訓みきかせられた。その静かな語調は自信に満ちみちていた。それもその筈、先生は「周礼」研究の第一人者で、そのご著書には、先生の三十余年間にわたって心血を注ぎ尽された高著「周礼経注疏音義校勘記」四六倍版、上下二冊（無窮会東洋文化刊）の大著を世に残されている。以上縷々と述べ来ったこの十三経注疏の学習は中々に程度の高いものではあったが、当時の私には苦しみの中にも、これらの難文を読み解いてゆく心よさを覚えた。

次に内田周平（遠湖、又は帆影）先生の近思録の授業の想い出を語りたい。当時先生の御令（おとし）は、已に八十才を超えておられ、教授陣中の最高齢であったと思われる。安政年間のお生まれとおききしている。ご風貌は、いかにもご高齢とお見うけしながらも、その体躯は見るからに矍鑠とし意気もまた盛であられた。先生ご自身の言によると、先生は始め医学を志ざされたが（注；先生は21才で東京帝国大学医学部に入学）、当時の世相をみるに、学生等の

若者は軽佻浮薄に陥り、三綱五常など、いわゆる人の道を学ぶ者の絶えてむなしい世状を憂い、遂に医学の修行を廃し（注；明治18年、24才で文科大学二年に編入）東洋哲学を志された由である。昭和十五年当時の先生のご出講時のお姿は、常に和服を召されていた。そしてその風貌は、頭髪も口ひげも、ぼうぼうとされたままで、誠に辺幅を飾らず、自然体であられた。

先生のご授業は、他の師とは大いに異なり、専ら先生の口述が主であったから、私等受講生にとっては、ただお話を伺っていればよかったわけで、平生輪講の指名に苦しんでいる身にとっては、いとも楽な時間であるように思われた。然しながら、この講義の内容は専ら形而上学に属する高度なものであったから、真に理解することは容易なことではなかった。生来形而上学を苦手とする私にとっては、中々に難しい時間でもあった。就中、尤も難渋したのは、宋の周敦頤の工夫して描いたと云われる「大極図」に就いての説明書、いわゆる「大極図説」の講義であった。先生はまず「大極図」を板書され、その図を指しながら解説されるのであった。その師説によれば「大極とは天地万物の本源であり、これより陰陽二気を生じ、二気は分かれて、木･火･土･金･水の五行となり、五行の精は凝って人類を生ずる。人類は五行によって、仁・義・礼・智・信の五性を得て、万物の霊となる」と云うのである。

原文は次のようである。

無極而太極　大極動而生陽

動極而静　　静而生陰

静極而動　　一動一静　互為其根　云々

誠に語数の少くして意味の深渕なものであった。

教室で、この出来の悪い私とは反対に、同学の山崎道夫氏は平生よりこの宋学に専念され、氏の畢生の学究課題とさえなっていた。それだけに内田先生の信頼も厚く、授業時には常に自ら進んで、助手の役をひきうけ、先生ご用意の教材を板書してくれていた。そして少しもその労をいとわなかった。お陰で私等は大いに助かったのであった。氏はその後とも内田先生の学統を継承し、百才にならなんとする長寿を保ちながら、宋学に関する多くの著作

を残している。氏はまた、無窮会創立八十年記念式典に於ける記念講演として「無窮会の精神と近思録」なる演題の下に、内田遠湖先生の家系図、並びに先生の学問について詳述している。

話はややそれてしまったが、遠湖先生の授業は中々に深遠で高度なものであった。その道に素養のない徒輩には中々理解し難いものであった。然しながらその講義のあいまには他の先生方にはみられない先生独自の体験談、いわゆる肩のこらない逸話めいたお話なども多く、中々に人間味の豊かさも覚えた。それに先生は自筆の詩文の旧稿の類を持参され、これらを惜しげもなく、我々子弟どもへお頒ち下さっている。この上欄に掲げた五言の古詩も、当時ご恵与いただいたものの一つである。これは先生ご自作のもので、巻頭の見出しには「春日偶成」と記されている。先生はこれを横巻の軸物に仕立て、私等弟子数氏に手交されている。（因みに、この軸物の仕立ては、タテ14センチ、ヨコ1メートル50センチと長いものである。）

内田遠湖　古詩　（省略）

この詩の内容は宇宙の大道と人生のあり方を詠ったもので、誠に意味深遠、先生の人と為りをうかがうに足るものである。この他に私のいただいたものの中には、和紙に墨書された自筆の文稿の「読聞過斎集」、並びに「栄松記跋」の二篇がある。いずれも端正な楷書でしたためられている。文後には大正丁未十一月、内田周平稿と記されており、文後には松平康国、寛妄評、斐拝読、章拝読、等々の批評が記されている。

⑩財団法人無窮会八十周年祝賀会席上、旧時を追懐して想いを綴る

平成七年（1995）財団法人無窮会は創立八十周年を迎え理事長筧正夫氏の下、記念祝賀会をアルカディア市ヶ谷（私学会館）で盛大に行なった。この折り編輯部は「無窮会創設八十周年東洋文化記念特集号」を刊行している。私はこの盛会に参加できたことを喜ぶとともに、そぞろ開所当時のことどもを想い出し、深い感慨を覚えた。指折り数えてみれば、東洋文化研究所の開

所も已に六十五年の昔のこととなり、今や当時の恩師の方々は皆道山に帰され、共に机を並べて学びあった友も、その多くは、この世を去っている。開所当時をしのぶにふさわしい資料として、私の手元に創立時代（昭和15・16・17年）の課業プリント、半紙版二十余枚一綴りのものが残っていた。これは上野先生と私とで毎週ガリバンに向って鉄筆を走らせたものである。私蔵するにしのびず、当年同図書館へ寄贈し、永くご保存されることを願った。そして一綴りの表紙には、その内容を次にように記しておいた。

無窮会東洋文化研究所　創立時代(昭和十五 十六 十七年度)課題プリント

一、各科、各学年、学期ごとの「講義日割」表

二、課題の「文題・詩題」一覧

三、輪読に用いた名家の文章（いずれも白文のまま）

四、東洋文化研究所研究生採用要項

(研究科第一期受講生　池田英雄　私蔵)

そして、この課題プリントの製作のいわれを「附記」として次のように記しておいた。

(附記)　嘗ての研究科第一期受講生　池田英雄

○このプリント製作の経緯について知るところを記しておきたい。

無窮会東洋文化研究所は平沼騏一郎先生によって昭和十五年(一九四〇)に創立された。授業クラスは研究科・本科の両部から成り、研究科は旧制の高等学校漢文科教員有資格者を採用し、三ヶ年間の専門学習をみっちりと伝授する甚しく程度の高いものであった。

教授の陣容はいずれも私学の耆宿、松平康国、内田周平、国分高胤、佐伯有義、山本信哉、松本洪、加藤虎之亮、川田瑞穂、上野賢知、吉田増蔵の諸先生を擁された。創設の年に幸にも私は十名程の学友と共に研究科に入学を許され、夜間週に三日の勉学にいそしんだ。私は川田・松本両先生のおはからいでクラスの世話役の仕事を与えられ、上野先生の下に在って諸事務の雑事に従った。当時、先生と交替に鉄筆を握りしめて書いたのが、ここに綴った二十四枚のプリントである。この中、均斉の

とれた達筆のものは上野先生､右肩上りの拙い書体は池田のものである。
私は諸先生の知遇に感じ専心勉学に打ち込んだが、好事魔多しの例にもれず、卒業まであと一ヶ年というところで風邪をこじらせて長い療養に入ってしまった。あれから五十余年、このプリントはこの間幾度かの米軍空襲の戦禍をくぐりぬけて運よく今私の手元に残っている。往時を追憶し、そぞろ懐旧の念にたえない。
この一綴は東洋文化研究所発足当時の課業のあり方を語る唯一の生き証人として、どうか研究所にて永くご愛蔵ねがいたい。今年は時恰も無窮会当研究所の創立八十周年の佳節に当たる､いささか思うところを記し、納入の辞とする。（平成五年（1993）重陽の日、謹記）

○なお、昭和 15. 16. 17 の各年度の「時間表」並に「講義日割表」の一部分は巻末に付しておきます。ご一覧を乞います。

注一　大東文化学院学科課程表

第三章　學科課程

第六條　本科ノ學科課程ハ左ノ如ク之ヲ定メ中等教育ニ於ケル國語漢文科教員タルノ學力ヲ具備セシム

本科

科目		第一學年	一週時數	第二學年	一週時數	第三學年	一週時數
正科目	皇學		二		二		二
	漢文 經學及子學		四		六		九
	漢文 支那哲學史						一
	漢文 史學		四		五		三
	漢文 文學		三		三		二
	漢文 支那文學史						一
	漢文 作詩作文		二				
	國語 講讀		九		八		六
	國語 作文文法		一		一		
	國語 言語學				一		一
	國語 文學史		一		一		一
	支那時文語		一三		一三		一三
參考科目		倫理學・心理學・論理學	二二	法學通論・經濟學	三	哲學概論・東洋政治學・教育學	二一一
武科		教練	二	教練	二	教練	二
		劍道・柔道・弓道ノ内一科	一	劍道・柔道・弓道ノ内一科	一	劍道・柔道・弓道ノ内一科	一
隨意科目		英譯四書		同上		同上	
總時數			三七		三七		三七

備考　作詩作文演習ハ課外トシテ毎週一回之ヲ課ス

第七條　高等科ノ學科課程ハ左ノ如ク之ヲ定メ高等教育ニ於ケル漢文科教員タルノ學力ヲ具備セシム

高等科

科目		第一學年	一週時數	第二學年	一週時數	第三學年	一週時數
正科目	皇學		四		四		二
	經學及子學		一一		一一		一一
	支那哲學史						二
	東洋政治學						二
	史學		二		二		
	文學		三		三		四
	作詩作文		一		一		一
	支那時文語及		三		三		三
參考科目		儒學史・西洋思想史(外國書)	四	東洋思想史・教育學及教授法(外國書)	四	東西思想比較	二
武科		教練	二	教練	二	教練	二
		劍道・柔道・弓道ノ内一科	一	劍道・柔道・弓道ノ内一科	一	劍道・柔道・弓道ノ内一科	一
科外		音韻學	一	東洋美術史	一	金石學	一
總時數			三二		三二		三二

備考　作詩作文ハ課外演習トナスコトヲ得

注二　東洋文化研究所講義日割表

(昭和十五年度)東洋文化研究所講義日割

始業式

日曜	研究科	本科
五月 六、月	本朝文粹	同上
七、火	論語	古詩源
八、水	詩	會
九、木	古事記	同上
一〇、金		左傳
一三、月	祝詞	同上
一四、火	詩經	
一五、水		
一六、木	近思錄	同上
一七、金		世說
二〇、月	本朝文粹	同上
二一、火	論語	古詩源
二二、水	文	會
二三、木	古事記	同上
二四、金		左傳
二七、月	祝詞	同上
二八、火	詩經	
二九、水		
三〇、木	近思錄	同上
三一、金		世說
六月 三、月	本朝文粹	同上
四、火	論語	古詩源
五、水	詩	會
六、木	古事記	同上
七、金		左傳
一〇、月	祝詞	同上
一一、火	詩經	
一二、水		

午后六時半

日曜	研究科	本科
一三、木	近思錄	同上
一四、金		世說
一七、月	本朝文粹	同上
一八、火	論語	古詩源
一九、水	文	會
二〇、木	古事記	同上
二一、金		左傳
二四、月	祝詞	同上
二五、火	詩經	
二六、水		
二七、木	近思錄	同上
二八、金		世說
七月 一、月	本朝文粹	同上
二、火	論語	古詩源
三、水	詩	會
四、木	古事記	同上
五、金		左傳
八、月	祝詞	同上
九、火	詩經	

(研究科本科共ニ午后六時半ヨリ八時半マデ)

	月	火	木	金
研究科	本朝文粹 吉田先生・祝詞 佐伯先生	論語 松平先生・詩經 加藤先生	古事記 今泉先生・近思錄 内田先生	
本科	同上・同上	古詩源 加藤先生	同上・同上	世說 松平先生・左傳 上野先生

(昭和十六年度)第一學期講義日割(東洋文化研究所)

日	研究科	本科
四月 十一日(金)	始業式	
十四日(月)	書經	世說
十五日(火)	詩經・禮記	博議
十六日(水)	詩會	、
十七日(木)	古事記	、
十八日(金)		左傳
二十一日(月)	論語	唐詩
二十二日(火)	近思錄・禮記	論語
二十三日(水)	文會	、
二十四日(木)	祝詞	、
二十五日(金)		左傳
二十八日(月)	書經	世說
二十九日(火)	(天長節)	
五月 一日(木)	古事記	、
二日(金)		左傳
五日(月)	論語	唐詩
六日(火)	近思錄・禮記	論語
七日(水)	詩會	、
八日(木)	祝詞	、
九日(金)		左傳
十二日(月)	書經	世說
十三日(火)	詩經・禮記	博議
十五日(木)	古事記	、
十六日(金)		左傳
十九日(月)	論語	唐詩
二十日(火)	近思錄・禮記	論語
二十一日(水)	文會	、
二十二日(木)	祝詞	、
二十三日(金)		左傳
二十六日(月)	書經	世說
二十七日(火)	詩經・禮記	博議
二十九日(木)	古事記	
三十日(金)		左傳
六月 二日(月)	論語	唐詩
三日(火)	近思錄・禮記	論語
四日(水)	詩會	、
五日(木)	祝詞	、
六日(金)		左傳
九日(月)	書經	世說
十日(火)	詩經・禮記	博議
十二日(木)	古事記	、
十三日(金)		左傳
十六日(月)	論語	唐詩
十七日(火)	近思錄・禮記	論語
十八日(水)	文會	、
十九日(木)	祝詞	、
二十日(金)		左傳
二十三日(月)	書經	世說

(昭和十七年度)各學年講義時間割　東洋文化研究所

	月	火	水	木	金	土
研三	詩經 加藤	論語 松平	莊子 加藤	古事記 今泉・詩會・文會		
研二	禮記 松本		近思錄 内田	古事記 今泉・詩會・文會	學庸 松本	
研一	韓非子 川田		近思錄 内田	古事記 今泉・詩會・文會	學庸 松本	
本三・二	左傳 上野	論語 上野	博議 川田	古事記 今泉・古詩源 加藤・詩會・文會	世說 松平・日本書紀 佐伯	
本一		呂氏春秋 松本	博議 川田	古事記 今泉・唐詩選 川田・詩會・文會	世說 松平・日本書紀 佐伯	孝經 上野

昭和十七年度學科配當(外ニ作文作詩)

研究科三年
詩經講讀(松平先生)
詩經註疏輪讀(加藤先生)
莊子集解輪讀(加藤先生)
古事記講義(今泉先生)

研究科二年
近思錄講義(内田先生)
禮記注疏輪讀(松本先生)
學庸輪講(松本先生)
古事記講義(今泉先生)

研究科一年
韓非子集解輪講(川田先生)
近思錄講義(内田先生)
學庸輪講義(松本先生)
古事記講義(今泉先生)

本科三・二年
世說輪講(松平先生)
東萊博議輪講(川田先生)
古詩源講義(加藤先生)
左傳註疏輪讀(上野先生)
論語集註輪讀(上野先生)
古事記講義(今泉先生)
日本書紀講義(佐伯先生)

本科一年
世說輪講(松平先生)
東萊博議輪講(川田先生)
唐詩選講義(川田先生)
呂氏春秋輪讀(松本先生)
孝經註疏輪讀(上野先生)
古事記講義(今泉先生)
日本書紀講義(佐伯先生)

第一學期詩文課題

四月　看櫻。從軍行
五月　新綠。題楠公訣別圖
六月　梅雨。孟母斷機圖
七月　蓮花。時事口占
(詩題)

論富　約觀櫻牘
林則徐論　題楠公訣兒圖
論賤岳之戰　讀萬葉集
避暑說　南洋地誌跋
(文題)

(昭和十七年度)第一學期講義日割

	研三	研二	研一	本三・二	本一
四月 十一日(土)	始業式				
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

【Introduction of Research Materials】

Hideo Ikeda's "Shugaku no Dojo Kaisoroku-Nanajunen mae no omoide no ito wo tagurite" (Recalling a Hall of Learning : A Memory of Daito Bunka Gakuin 70 Years Ago) (Chapter 2): "Daito Bunka Gakuin" and "Mukyukai"

Nina Asanuma

This text introduces chapter two of Hideo Ikeda's memoir.

After graduating from *Daito Bunka Gakuin* in 1932 he taught Chinese Literature at a secondary school. Concurrently, the graduate school of *Mukyukai* (Institute of East Asian Studies), which had just been founded, admitted him as one of the first graduate students of *"Kangaku"* or Sinology.

This text introduces Ikeda's life as a graduate student at *Mukyukai* Institute.